

## Jack Kerouac sat down beside the Wanganui River and Wept

Michael Morrissey

*The Oxford Book of New Zealand Short Stories*

Late on Christmas Day Jack Kerouac was hitching through Putaruru with a Maori driving a 1967 Falcon Ute. The town was so quiet – even the Takeaways were closed – that Jack said, ‘Are they making a film here?’

‘Not in Putaruru,’ said the Maori laughing. ‘They made an ad here once.’

‘They did!’

‘Yeah,’ nodded the Maori, ‘about the end of the world,’ his body shaking so violently Jack Kerouac could hear the forty-five cents in his pocket begin to jingle.

‘The world isn’t going to end,’ said Jack Kerouac, ‘even though it feels like it.’

‘Hang-over?’ asked the Maori.

Jack Kerouac stared forlornly at the empty street. ‘Any girls in Putaruru?’

‘Lots of them,’ said the Maori, ‘but not this time of year.’

‘I’m looking for a grave,’ Jack Kerouac said.

‘On Christmas Day? – you got it wrong, Pakeha – that’s the day he got born – he got buried at Easter.’

‘His name’s James K. Baxter. I heard he died around these parts.’

‘Not in Putaruru,’ said the Maori. ‘Never heard of him.’

‘He wrote a lot of poetry before he died.’

‘But not much after he died, eh?’ the Maori laughed again.

‘I don’t think death should stop us doing anything,’ said Jack Kerouac.

‘There’s no red lights on Christmas.’ The Maori roared through an amber one. ‘What are you doing for a feed?’

‘Bottle of Coke, takeaway – that’s all I need.’ Jack Kerouac looked down at the holes in his blue canvas crêpe shoes.

‘You look thin, Pakeha,’ the Maori grunted, ‘haven’t you got anyone to look after you?’

‘Course I have,’ said Jack Kerouac, ‘but mémère isn’t here.’

‘Who’s mémère? A racehorse?’ The Maori shook with laughter.

‘My mother,’ Jack Kerouac’s voice froze over.

‘O.K.,’ said the Maori, ‘but you listen to me, Pakeha. I got chicken, eggs, plenty of kai – and lots of beer – how about a feed?’

‘I’ve got to find Baxter first,’ said Jack Kerouac.

‘He won’t feed you though, will he?’

‘He’ll feed me,’ Jack Kerouac flicked his hair, ‘he’ll feed me.’

The Maori dropped Jack in Taupo.

Jack went into a takeaway and ordered a Giant burger without the pineapple.

## ジャック・ケルアックはワンガヌイ川のほとりに座って泣いていた

マイケル・モリッシー 著者

「オックスフォード出版社のニュージーランド短編小説集」

クリスマスの日午後、ヒッチハイクをしているジャック・ケルアックは、古いピックアップトラックで乗せていってくれたマオリ人と一緒に、オークランドから 200 キロ東南にあるプタルルという町を通っていた。町は小さな店さえも閉めているほど静かだったので、ジャックは「ここで今映画が撮影されているのかい。」と聞いた。

「プタルルではそんなことはないよ。」とマオリ人は笑いながら言った。

「いつかここで CM が撮影されたよ。」

「そうかい。」

「うん。」マオリ人は頷いた。「世界の終わりについての CM だったよ。」マオリ人は、ジャック・ケルアックがポケットの中にある 45 セントのコインがジャラジャラ鳴るのが聞こえるほど、激しく笑い始めた。

「世界は終わらないよ。」とジャック・ケルアックは言った。「そんな風にも感じて。」

「二日酔いか。」とマオリ人は聞いた。

ジャック・ケルアックは人気のない道を寂しそうに見つめた。「プタルルには、女はいるかい。」

「いっぱい。」とマオリ人は言った。「けどこの時期にはいない。」

「墓を探しているんだ。」とジャック・ケルアックは言った。

「クリスマスの日には？パケハ、あんたはなんか間違えているじゃないか。クリスマスの日にはキリストの生まれた日だよ。埋葬されたのはイースターだよ。」

「ジェームズ・K・バクスターという男。この辺で死んだと聞いたんだ。」

「プタルルではそんなことはないよ。」とマオリ人は言った。「そんな名前、聞いたことないよ。」

「有名な詩人だったんだ。死ぬ前は多くの詩を書いていた。」

「だけど死んだ後は何も書いてないよね。」マオリ人はまた笑った。

「死は、人には何も防ぐべきではないと思う。」とジャック・ケルアックは言った。

「クリスマスの日には赤信号はないよ。」と言って、マオリ人は黄信号を走り抜けた。「晩飯、どうする？」

「コーラとコンビニからのなんかちょっとした食べ物でいいんだ。」ジャック・ケルアックは青いキャンバス布でクレープの靴底にあいた穴を見た。

「パケハ、あんたがやせこけそう。」とマオリ人はぶつぶつ言った。「世話してくれる人がないのか。」

「もちろんいるさ。」とジャック・ケルアックは言った。「だけどメメレはここにいないんだ。」

「メメレって誰？競走馬？」マオリ人は体が揺れるほど、激しく笑った。

「俺のおふくろさ。」ジャック・ケルアックの声は突然冷かになった。

「OK。」とマオリ人は言った。「だけどさ～、パケハ、聞けよ。俺はチキンや卵やカイがたくさんあるし、ビールもいっぱいあるよ。なんか一緒に食べないかい。」

「まずバクスターを見つけなくちゃいけないんだ。」とジャック・ケルアックは言った。

「でも奴はあんたを満腹させないよね。」

「だけど満足させてくれるよ。」ジャック・ケルアックは髪をかきあげた。

「満足させてくれるんだ。」

マオリ人はプタルルから 80 キロ南にあるタウポ市でジャックを降ろした。

ジャックはコンビニに入って、サンドイッチを買った。